

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム —フランス政治の変容と国民戦線 (FN) に ついて考える (7・完)

畑 山 敏 夫

はじめに

1. フランス社会の変容と右翼ポピュリスト政党
 - (1) 「栄光の30年」の終わりとは政治の変容—安定した政治の終焉
 - (2) フランスの経済社会の変化と新しい分断の時代へ—「二つのフランス」へ
 - (3) 移民問題の争点化—FNの躍進を支えたもの
 - (4) 政治システムの変容—FNというオルタナティブ
2. 政治家マリーヌ・ルペンを理解するために—ルペンの娘に生まれて
 - (1) マリーヌ、親に貰いし名は—「共和国の悪魔」の娘に生まれて
 - (2) 弁護士から政治の世界へ—マリーヌとFNというマイクロコスモス(以上、第50巻第3号)
3. ルペン時代のFN—二つのFNの連続性を理解するために
 - (1) 周辺的政党からの脱却—鳴かず飛ばずから突然の躍進へ
 - (2) 「新右翼 (la Nouvelle droite) の加入とFNの刷新
 - (3) 「新右翼」のFN改革—政党イメージ転換へ
 - (4) 党の分裂とFNの危機 (以上、第50巻4号)
4. 「危機のFNと党の刷新—「マリーヌのFN」への道
 - (1) 再生に向かうFN—分裂の後遺症を抱えながら
 - (2) 抵抗勢力の排除へ
 - (3) 党の地方で拠点を築く—エナン・ボーモンでの政治家修行
 - (4) 新党首マリーヌ・ルペンの誕生と党の刷新 (以上、第51巻第1号)
5. 「マリーヌのFN」の「古さ」と「新しさ」
 - (1) FNは変わったのか?
 - (2) 「脱極右政党」への長い道

- (3) アウトサイダーからインサイダーへ—FNの適応戦略
- (4) FNの変化と連続性—「節度あるオルタナティブ」へ（以上、第51巻第2号）
- 6. グローバル化時代の「ポピュリズム」
 - (1) EU統合への失望と欧州懐疑主義の広がり
 - (2) FNの反EU論—グローバリストのプロジェクトに抗して
 - (3) 右からのオルタナティブ—処方箋は「再国民化」（以上、第51巻3号）
- 7. マリーヌ路線の成功—FNの復活と躍進
 - (1) 選挙での連戦連勝—始まったFNの復活
 - (2) マリーヌの「善戦」を支えた支持者たち
 - (3) 2017年大統領選挙—マリーヌの「善戦」
 - (4) 明らかになったFNの限界（以上、第51巻第4号）
- 8. フランス政治の変容とFN
 - (1) 政党システムの変容とFN
 - (2) 社会・文化の変容とFN
 - (3) ポピュリズム時代の中で—ポピュリズム化する極右
おわりに—「マリーヌのFN」とフランスのデモクラシー

8. フランス政治の変容とFN

1972年に結成されたFNは、1980年代前半に突如としてフランスの政党システムに参入し、その後は恒常的要素として定着してきた。FNは好不調の波はありながらも、長期的に見れば各種選挙で得票を増加させてきた。気がついてみれば、FNは半世紀に近い歴史を持つ「老舗政党」となり、新党首マリーヌ・ルベンの下で一層の躍進を果たしてきた。

2018年の後半に入ると、マクロン大統領の支持率は急落し、世論調査によっては、マリーヌがトップに躍り出ている。

FNの躍進は束の間の現象と見られ、低迷期が訪れるたびに党の消滅が囁かれた。だが、そのような期待も含んだネガティブな診断はことごとく裏切られてきた。FNの台頭はフランス政治で偶然に出現したのではなく、フ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

ランスの社会と政治の変容が生み出した現象だからである。つまり、FNの政党システムへの参入と定着は、戦後の経済成長を背景とした、相対的に安定した政治秩序の揺らぎを反映した政治現象である。ゆえに、その構造的要因が消滅しない限り、FNが政党システムから退場することはない。

要するに、FNの台頭と定着は単純な状況的要因に左右されたものではなく、グローバル時代のなかでフランスの経済と社会、文化が変容し、その結果として政治が経験している構造的変化を反映した現象であり、その意味で、政治の領域を超えて多様な側面から考察されるべきものである。

本稿では、これまでFNの持続性と変化について検証してきた。一方で、「ルペンのFN」と「マリーヌのFN」の戦略やイデオロギー、組織面での持続性を明らかにし、他方で、「マリーヌのFN」による支持者の最大化を目指した戦略の変化について見てきた。

本章では、これまでの各章の内容を踏まえながら、社会経済と政治の変容というより広い文脈でFN現象を多角的・立体的に考察してみたい。なお、フランスの政治と社会の変容については第1章で扱ったが、FN現象の分析と考察に必要な限りで、本章でも言及する。また、右翼ポピュリズム政党であるFNは民主主義の敵であるのかという問題、FNと民主主義の関係についても簡単にではあるが触れてみたい。

(1) 政党システムの変容とFN

2017年の大統領選挙におけるマリーヌ・ルペンの「善戦」はフランス社会の変容を示しているが [Ivaldi 2017 : 109]、同時にそれは、フランス政治の変容も表現している。

戦後の経済成長の行き詰まりに直面した既成政党は、1980年代には欧州統合と新自由主義的改革の方向に活路を見出した。左翼と保守政党の政策的違いは縮小し、企業の国際競争力の強化と「小さな政府」の方向に収斂していった。その結果、雇用や購買力、生活水準の低下、社会保障の縮減などに対して既成政党は的確に対応できなかった。

2000年代に入ると、リーマン・ショックやギリシア危機のような財政金融危機が発生し、大量失業、格差と不平等の拡大、大量移民・難民の流入といっ

た深刻な社会問題が山積するが、政権交代を繰り返しながら、有効な問題解決能力を発揮できない既成政党・政治家への不信や不満が高まった。戦後を特徴づけてきた左右の既成政党による支配は揺らぎ、政治の液状化が始まった。

FNの台頭は、そのような戦後政治の変容を背景としていた。ポピュリズムが「移行期ないし変動期という一定の局面において浮上する政治現象」[中谷 2017: 8]である以上は、まず、フランス政治の変容の文脈で考察されるべきである。

二極対立構造の変容—左翼と保守という対立軸の希薄化

長らく戦後フランスでは、経済成長と社会的再分配をめぐる左右両翼の政党間にコンセンサスが成立してきた。保守政権によって経済成長が追求され、社会保障や福祉の充実も図られてきた。だが、1973年の石油危機を契機に高度経済成長の時代が終焉すると、成長と社会的再分配をめぐるコンセンサスは壊れ、新自由主義的コンセンサスが支配的になっていく。経済成長を前提とすることは変わらないが、市場の重視、行財政改革と「小さな政府」、福祉の縮減、規制緩和、民営化、フランス経済の国際競争力強化などを重視する新たなコンセンサスが支配的になっていった。

ヨーロッパのデモクラシーの支柱であった社会民主主義とキリスト教民主主義の伝統的対立軸は後景に退き、政治はエリートとEUをめぐる対立軸の周辺に編成されるようになった[*Le Monde*: 13 août 2016]。新自由主義に傾斜した既成政党・政治家とEUへの不信と不満は高まり、有権者の一部はポピュリズム的宣伝・扇動に反応するようになった。

その結果、フランスでも政党システムの二極対立構造は揺らぎ、既成政党の弱体化と左右の新興政党の影響力の強化が進行している。つまり、有権者の既成政党離れと反エスタブリッシュメント的な新興政党への支持の高まりという現象がフランス政治の場でも顕在化してきた。

その背景には、政治の争点が伝統的な左翼と保守の枠組に納まらなくなっていることがある⁽¹⁾。左翼と保守の対立を軸に展開されてきた政治は対立軸の多様化に直面している。例えば、2019年の欧州議会選挙では地球温暖化が

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
大きな争点になり、各国でエコロジー政党の伸張をもたらしている。

さらに、有権者の投票行動が個人主義化することで流動性が高まっている [Perrineau 2012 : 26]。政党への忠誠度は低下して、有権者の意識と投票行動の次元でも二極対立構造は崩れつつある。

FNの躍進は、伝統的な政党システムの液状化がもたらした現象であったが、同時に二極対立構造の変容を促進する要因でもあった。FNは着実に得票を伸ばし、第2回投票に進出する確率を高めている。たとえば、2015年の県議会選挙では、FN候補は51%の選挙区で第2回投票に進出し、これまで、左翼と保守の対立パターンが支配的であった決選投票の風景は大きく変わりつつある。

国民議会選挙のような小選挙区制で実施される選挙では、決選投票が保守・左翼・FNの三つ巴になるパターンが増えている。フランス政治ではFNの急伸によって二極対立構造 (bipartisme) が崩れ、三党対立構造 (tripartisme) に移行しつつある。2014年欧州議会選挙でも二陣営の対立から三党の対立パターンへの移行の可能性が顕在化したが、それが鮮明になったのは先述した2015年の県議会選挙であった。

FNは半分以上の選挙区で、決選投票進出の条件である12.5%以上を得票して第2回投票に進出した。同選挙では二党対決パターンは、左翼とFNが293選挙区、保守とFNが532選挙区であるのに対して、保守・左翼・FNの対決パターンは264選挙区であった (保守・保守・FNは18選挙区であった) (Le Gall 2016 : 19-20)。

以上のように、有権者の意識や投票行動における変容を背景に、政党システムの伝統的な二極対立構造は変化しつつある。既成政党の衰退は、ポピュリズム政党が躍進する原因であると同時に結果でもあった。

エリート支配の限界—民衆とエリートの乖離

ポピュリズム現象は、エリート支配への反発や嫌悪感の高まりも背景にしている。確かに、フランスは典型的なエリート支配の社会である。特に、政治の領域では、高級官僚の養成を目的とする国立行政学院 (ENA) を始めとしたグランゼコール出身者が、左翼と保守の違いを超えて重要な役割を果

たしてきた。

戦後の相対的に安定した政治の中で、エリート官僚とエリート政治家たちは高度経済成長を主導してきた。1968年の「5月革命」のようなエリート支配への激しい異議申し立て運動は起きたが、エリートによる統治は揺らぐことはなかった [畑山 1995b]。

現職のマクロン大統領も、典型的なエリート・コースを歩んでいる。2017年の大統領選挙でマクロンが当選したとき、彼の華々しい経歴が注目された。パリ政治学院、国家行政学院（ENA）を卒業し、財務監査官として勤務した後は、ロスチャイルド系の投資銀行の経営幹部に登用されている。そして、マクロンは若くして政界に転進し、オランダ大統領の大統領府副事務総長、経済産業デジタル大臣を務めている。

フランスでは多くの有力政治家は、一般の大学ではなくエリート養成のグラン・ゼコールを卒業している。左右の政治的立場は違っても、多くの大統領や首相、大臣は同じような恵まれた社会層に属し、エリート養成の高等教育機関で同じ釜の飯を食ったエリートたちである。

例えば、社会党出身の大統領や首相を例にとれば、自主管理社会主義を唱えて左翼連合政権を率いたF・ミッテランはエリート教員の養成機関である「高等師範学校（エコール・ノルマル）」の卒業生であり、1997年に首相になったL・ジョスパンはENAの出身であった。特に、ENAは多くの社会党の指導的政治家を輩出しており、L・ファビウス元首相（1983年就任）、オランダ前大統領（2012年就任）などもENAの卒業生であった。それは保守陣営でも同様で、N・サルコジを例外に、V・ジスカール・デスタン、J・シラクとENAの卒業生が大統領を務めてきた [橘木 2015: 114-120]。

自由・平等・博愛を国是としているフランスであるが、実際は典型的な学歴社会であり、エリートと大衆の世界が隔絶した社会である。だから、一般の大学で法律を学び、大衆に近い言葉で語りかけるジャン＝マリー・ルペンだからこそ、エリートたちを激しく糾弾し、民衆の「護民官」を演じることができたのである。

その点では、父親とマリーヌは共通している。大学で法律を学び、パーティやダンスを好むマリーヌは、父親ルペン以上に大衆性を備えている。マリー

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
ヌのポピュリスティックな言説が説得力と魅力を持つのは、フランスのエリート支配の現実が背景にあるからである。エリート支配の政治が民衆の期待に応えられないことでエリートへの不信と反発が高まり、その結果、多くの民衆の有権者がマリーヌ支持へと向かっている。

その意味で、FNの伸張はクラウチが指摘しているように政治が特権階級の支配に服し、市民が主権者としての能力を喪失しているポスト・デモクラシー状況に由来した現象であるといえる [クラウチ 2007]。

排外主義の「ノーマル化」－FN言説の浸透

反エリートの主張は移民・難民政策と摺合され、エリートの責任が非難されている。FNのメインテーマである移民・難民、治安、テロ・イスラムといった争点は既成政党に突き付けられ、その排外主義的政策やレトリックはメインストリーム化しつつある [Mandon 2013 : 184]。

2007年の大統領選挙で、保守候補のサルコジはFN支持者を回収することを意識して、ナショナリスティックで排外主義的な主張を展開した [畑山 2008 : 86-87]。大統領選挙に向けて発表された『フランス国民への手紙』のなかで、サルコジはフランスで生活することを望む移民にルールが課されるべきことを強調し、政教分離、公共空間でのブルカの着用、学校教育のキャリアキュラム、男女平等、女性の働く権利、一夫多妻と割礼、プールと医療機関の受診、学校給食での特別な配慮といった問題を列挙している [Mandon 2001 : 172]。それは、事実上はイスラムの風習や文化を否定することを意味しており、極めて排外主義的な立場を表明していた⁽²⁾。

2012年の大統領選挙でも、保守政治家からFNの立場への接近が見られた。内務・移民問題担当大臣C・ゲアン (Claude Guéan) は、2012年の大統領選挙のテーマが「我々が現在経験している社会とアイデンティティ、道徳、文明の危機に対していかに向き合うかである」と述べている [Mandon 2013 : 170]。ゲアンは、2012年2月に開催された「国民運動連合 (UMP)」の学生集会でも、すべての文明が同化可能であることを否定し、特定の文明をターゲットにしているわけではないと断りながら、路上での集団礼拝、国民議会のような公共の場でのヒジャブ着用の禁止といった、反イスラム的政策を主

張している。サルコジは、ケアンChiracの排外主義的発言を「常識(common sense)」であると擁護している [Mandon 2001 : 170]。

マリーヌが「イスラムは政教分離を受け入れるべき」と発言すると (2012年2月12日)、ケアンは「イスラムは共和国の理念に従うべき」と応じている。サルコジも「キリスト教に基づく祝日は『フランス共和国の政教分離の文明』に属している」と呼応している [Mandon 2001 : 170]。共和政と政教分離の理念が「常識」であるとすれば、イスラムは「常識に反する宗教」ということになる。

移民・難民問題が深刻化するなかで、既成政党の政治家の中から、排外主義的で差別的なFNに同調する言説が表面化している。「排外主義のノーマル化」とでも呼ぶべき現象が「FNのメインストリーム化」に貢献している⁽³⁾。

FNの脱孤立化戦略—政党システムの再編の模索

既成政党による支配の揺らぎは、FNを主軸とした政界再編の可能性を広げている。単独で勝利する可能性が低い以上、FNの影響力の拡大には保守勢力との協力が必要である。そのために、FNは1980年代から保守側を揺さぶる戦略を駆使してきた。比例代表制で実施された1986年の国民議会選挙では、FNの「国民結集(Rassemblement national)」のリストに多くの保守系候補がリクルートされた [畑山 1997 : 120-121]。

ルベンの片腕であったB・メグレは「保守とFNの間の国民的規律」について言及し、右翼陣営における「共和主義的」デジストマン(候補者取り下げ)を提案している。それに対して、RPR(共和国連合)のA・ペルフィット(Alain Peyrefitte)はFNとの協力を支持し、FNも含めた右翼陣営の結集を訴えた [Igounet 2014 : 288]。結局、保守陣営はFNとの協力を拒否したが、左翼との競合のなかでFNに対する「防疫線」は崩れ始めていた。

FNと保守の協力関係が再び焦点となったのは、1998年の地域圏議会選挙の時であった。FNは第1回投票の後に、「自国民優先」や移民問題に対するFNの立場にこだわらず、左翼との闘いを優先することを保守側に提案した。その結果、6つの地域圏議会で、FNの協力で保守系議長が誕生した(ブルゴーニュ、ピカルディ、ラングドック＝ルシヨン、ローヌ＝アルプ、フラ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
ンシユ＝コンテ, サントル) [Igounet 2014 : 295]。

保守の側も、FNの政策を取り込むことでFN支持層の回収を目論んできた⁽⁴⁾。

例えば、FN支持者を獲得するための言動は、2007年の大統領選挙ではサルコジは、FN支持者を意識した選挙キャンペーンを展開し、「サイフのように」FN支持者の回収に成功した [畑山 2008 : 169-170]。他方で、サルコジの移民の治安、ナショナル・アイデンティティをめぐる言説と政策は、FNの主張を正当化し、FNを「メインストリーム化」することに貢献した⁽⁵⁾。

また、サルコジは、FNを「普通の政党」と評価する発言もしている。FNは「民主的政党」であるだけでなく、その価値観は共和制と両立可能であると述べている [Le Monde 25 avril 2012]。

他の保守政治家からも、FNとの連携を肯定する動きが現れている。国防大臣G・ロンゲ (Gérard Longuet) は、「何百万人の死者と悲惨な第二次世界大戦につながる独ソ不可侵条約に責任がある」フランス共産党との協力が左翼側で成立している以上、UMPがFNと協力することを禁じる道徳的な理由はないと述べている [Mandon 2013 : 180]。UMP党首J-F・コペ (Jean François Copé) は、FNの当選を阻止するために保守と左翼の間で結ばれてきた選挙協力である「共和主義戦線 (Front républicain)」を実施しないことを促がしている [Mandon 2013 : 182]。

他方で、FNに近い立場の保守系議員の集団も活動している。UMP最右派の国民議会議員40人を中心として、2010年に「民衆の右翼 (La droite populaire = DP)」が結成された [Bréchon 2012 : 170]。DPはL・リュカ (Lionel Lucca), J・ミヤール (Jacques Myard), Ch・ヴァネスト (Christian Vanneste) といった国民議会議員が中心であるが、治安に関するテーマやイスラム教徒と二重国籍保有者、外国人に地方参政権を付与する問題で批判的立場をとっていた。彼らはFNの言説の大衆化に貢献し、将来における保守とFNの協力に向けた「架け橋 (passereille)」になろうとしている。DPの創設者で運輸大臣を務めていたTh・マリアニ (Thierry Mariani) は『レクスプレス』誌上で、「ますます多くの支持者がマリーヌ・ルペンは人種主

義者でも反ユダヤ主義者でもなく、有罪判決を受けたこともなく、UMP 党員の3分の2が心の中で考えていることを公然と語り、15年前にRPRが語っていたことを口にしてしている」と発言している [Rosso 2011 : 281]。

DPのCh・ヴァネストも「なぜ極右との関係が全く考えられないことだと思ふ必要があるのか?」と発言し(2010年10月6日)、モンフェルメイユ(Montfermeil)のUMP系市長であるX・ルモワヌ(Xavier Lemoine)も「FNを含んだ全右翼勢力の結集を実現するのは必要かつ不可欠なことである」と主張している [Corbière 2012 : 145-146]。

保守政党のなかでFNと近い主張を展開する政治家が現れ、「保守のFN化」とでも呼ぶべき傾向が見られ、FNの政界再編戦略に有利な環境が作りだされている⁽⁶⁾。

FNが「脱悪魔化」によって「脱極右化」を進め、既成政党への国民の不信や不満が高まったとき、保守の中から生き残り戦略としてFNとの連携を模索する勢力が拡大する可能性は否定できない⁽⁷⁾。

中道左派の危機—左派へのオルタナティブとしてのFN

ポピュリスト勢力の伸張は、中道左派(社会民主主義)勢力の衰退と相関している。社会民主主義勢力の衰退は新しい現象ではなく、「栄光の30年」の終焉とともに始まっている。だが、EUの行き詰まりや移民・難民問題の深刻化、格差と貧困の拡大とともに、先進社会では至る所で中道左派政党の衰退に拍車がかかっている [Edin 2019 : 12]。今日では、社会民主主義政党は資本主義社会への批判を独占できなくなり、グローバル化によるデクラッセの不安や移民・難民問題による文化的純粋性の希薄化、アイデンティティをめぐる議論の高まりは、先進各国でポピュリスト勢力に有利に働いている [Le Monde : 13 août 2016]。

戦後政治において長らく重要な役割を果たしてきたフランス社会党も、中道左派の衰退という現象を免れていない。1981年にミッテラン政権が成立して以来、保守との政権交代を繰り返しながら社会党は左翼陣営を牽引してきた。近年では、シラク、サルコジと保守勢力に大統領ポストを奪われてきたが、2012年の大統領選挙でオランドが勝利し、社会党は政権に返り咲いた。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

ただ、オランドはサルコジ前大統領への反発と嫌悪によって支持を集めた側面が強く [土倉 2013: 19], 大統領就任後もあまりの不人気から、次期大統領選挙への立候補断念に追い込まれた。

予備選挙によって社会党の大統領選候補になったB・アモン (Benoit Hamon) は、第1回投票で6.8%と惨敗を喫し、引き続き実施された国民議会選挙でも社会党は7.5%の得票率で33議席 (連携する政党の議席も含む) に終わっている。

そのような衰退の原因は何であろうか。第1には、社会党は政権政党化するなかで中間層へと支持基盤を移し、民衆層から見放されていったからである。社会党 (と共産党) は伝統的に労働者層を始めとした民衆層を支持基盤としてきたが、その支持基盤は左右のポピュリズム政党 (FN と「不服従のフランス」) によって浸食されている。2017年の大統領選挙でも、民衆層は大挙としてFNに流れている⁸⁾。第2には、経済社会の変化への「適応」の結果であったが、フランス社会党は「現実主義化」のなかで政治的オルタナティブであることを断念したことである。

戦後の経済成長を背景とした「ケインズ主義的福祉国家」の路線が行き詰まったとき、中道左派は脱資本主義国家を指向する「変革の政治」ではなく、新自由主義のヘゲモニーによる社会編成に立脚する「社会リベラリズム」へと舵をきった。

それは、1980年代初めの左翼連合政権から進行していた現象であった。1981年のミッテラン政権誕生に向けて社会党は「生活を変える」というスローガンを唱え、「自主管理社会主義」という理想を掲げ、共産党との協力を踏み切った。フランス社会党は、「変革の党」として有権者の期待を掻き立てた。だが、政権政党として現実主義化し、左翼ケインズ主義的路線を放棄して1983-1984年には新自由主義の方向へと舵を切り、「変革の党」ではなくなった。

第3に、民衆層の離反を埋めるかのように、中道左派は文化的リベラリズムに傾斜していったことである。1997年に成立するジョスパン政権 (「多元的左翼」政権) が、中道左派の変質を象徴的に示している。同政権は、経済産業政策や社会的再配分政策の領域での政策実現が困難ななかで、性的マイ

ノリティのカップルにも法定婚の権利を保障する効果を持つ「民事連帯契約（パックス）」、男女における候補者を同数に近づける「パリテ法」といった女性や性的マイノリティの側に立った法制度や、高速増殖炉「スーパーフェニックス」の廃炉、ローヌ・アルプ運河計画の中止といった環境政策を優先した。それは、環境や女性・性的マイノリティの権利に共感する文化的リベラリズムの価値観をもつ中間層を意識した争点であった〔畑山 2009：146-149〕。

第4に、1980年代にグローバル化が進展するなかで、中道左派は経済のグローバル化と福祉国家の行き詰まりに直面して、民衆の苦境に応えることができなかったことである。

彼らが長らく支持基盤としてきた民衆層に対して、グローバル化による生活と雇用の悪化と移民・難民の流入といった問題に的確な対応が取れなかった。その結果、民衆層の利益を防衛するというポピュリズム的言説が有効性を高めた〔Perrineau 2012：161〕⁹⁾。中道左派が新自由主義への有効なオルタナティブを打ち出せないなかで、右翼ポピュリズム政党は、経済的ナショナリズムと文化的ナショナリズムを融合させたイデオロギーによって民衆層を魅了している〔Perrineau 2012：163〕。

第5に、社会党が「中道での合意」を受容し、政治をイデオロギーや政策の対立ではなく、エリートの対立へと変質させてしまったことである。

中道左派と中道右派のエリート政治家が新自由と欧州等統合の推進に収斂するとき、民衆を犠牲にしたエリート支配という右翼ポピュリズム政党にとって格好の攻撃材料を提供した。

そのような既成政治への不満と不信は、特に、変革主体として期待してきた中道左派への幻滅をもたらし、一部の支持者をFNへと向かわせることになった。

（2）社会・文化の変容とFN

二つのフランスへの分断—不可分の共和国の変質

2017年大統領選挙でのマリーヌの「善戦」は、「不可分の共和国」の分断状況を反映している。一方で、パリ、リヨン、トゥールーズといった経済活

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

動が活発で豊かな大都市が、他方で、フランスの人口の60%を占める農村や地方都市へとフランスは分断されている。後者は「周辺部フランス (France périphérique)」と呼ばれ、パン屋や肉屋が一軒もなくなった小村も含まれ、フランスの二極分化を表現している [村上 2016 : 84-85]。

そのような周辺化するフランスには、フランス東部と北部の産業が衰退して地域社会が荒廃しつつある地域も含まれている。2017年の大統領選挙では、マリーヌは北・東部の3地域圏(ノール＝パ＝ド＝カレ、シャンパーニュ＝アルデンヌ、ピカルディ)でマクロンを凌ぐ得票をあげ、そのような地域での浸透を印象付けている。大都市部を中心に優勢なマクロンと、地方の小都市や産業の衰退した地域、農村部で優勢なマリーヌという対照的な得票分布は、フランスの地理的分断を鮮明に表現している⁽¹⁰⁾。

分断は地域レベルだけではなく、FNの得票は社会レベルの分断も表現している。これまでも民衆的社会層でFNは支持を伸ばしてきたが、マリーヌのもとでもその傾向は続き、更に拍車がかかっている。2017年の大統領選挙で、第1回投票から決選投票でマリーヌは得票を伸ばしているが、職業的カテゴリーでは、労働者(+21%)と自営業主(+19%)で伸張し、学歴に関しても、ディプローム不所持とCEP(職業教育修了証)所持者で18%増加している。FN支持層の民衆的性格は顕著になっている [Le Gall 2017 : 52]。

2つに分断されたフランスで、既成政党に見放され、不満と不信が高まる地域や社会層でFNは影響力を高めている。

グローバル化の「勝者」と「敗者」－新しい対立軸の反映

フランス社会の伝統的な左翼と保守の対立軸ではなく、個人を核とした社会を前提にグローバリズムに開放的姿勢をとるリベラリズムの立場と、共同体を維持するために閉鎖的姿勢をとる反リベラリズムの立場という新しい対立軸が浮上しているが [吉田 2017 : 66]、開放と閉鎖という新しい対立軸においてFNは閉じた共同体の選択を擁護している。

そのような対立はフランスで拡大している社会的・地理的亀裂とオーバーラップしている。グローバル化への適応－不適応は地域と個人に格差を生み出している。いわゆる、グローバル化から恩恵を得ている「近代化の勝者」

表 8 - 1 近代化の「勝者」と「敗者」(%)

	近代化の敗者	近代化の勝者
マリーヌへの投票	25	7
2012年大統領選挙第1回投票での棄権	32	13
フランスでは移民が多すぎる	57	31
企業と社会モデルに脅威を与えるのでグローバル化は危険	74	46
保護主義は「ポジティブな」言葉	64	49
EUへの加入はフランスにとっていいこと	32	64

CEVIPOF による2012年大統領選挙後の調査

*近代化の「敗者」は月ごとの世帯所得が2000ユーロ以下で、バカロレアを取得せず、多かれ少なかれ失業のリスクがあると考えている労働者と事務従事者、「勝者」は上級管理職、自由業、中間管理職で、世帯所得が2000ユーロ以上でバカロレア以上の学歴を取得し、失業のリスクを感じていない人々である。

出典：[Perrineau 2014 : 112]

と不利益を被っている「敗者」という亀裂である。表 8 - 1 は、「近代化の勝者」と「敗者」の投票行動と考え方について尋ねた世論調査の結果である。

「近代化の敗者」は、移民やグローバリズム、EU に対してはネガティブな考えをもち、保護主義に対して肯定的である。選挙での投票行動としては棄権か FN に投票する傾向が強い。マリーヌは、近代化の「敗者」では25%を得票し、反対に、「勝者」では7%しか得票していない。FN は完全に近代化の「敗者」を代表する政党であり、グローバル化がもたらした社会的亀裂から利益を得ている⁽¹¹⁾。

2012年から2015年までの各種選挙を通じて FN 票は増加に転じているが、2005年の欧州憲法条約案をめぐる国民投票において賛成票を投じた社会層 (la France de oui) への浸透に苦しんでいる。グローバル化に適応するフランスの能力を信じ、危機の影響から最も保護されている社会層 (上級管理職、自由業) で、FN は苦戦を強いられている [Dabi 2015 : 100]。反グローバリズム、反 EU・ユーロを唱えることで、FN は国民投票で反対票を投じた社会層 (la France de non) の代表であることを訴えてきた戦略が効を奏していると言える。

グローバル化の下で「開放的」社会と「閉鎖的」社会の間に亀裂が走り対立が浮き彫りになっているが、グローバル化と資本主義の構造的変化によっ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
て脅かされている地域と社会層に焦点を当て、保護を与えるという言説は、「近代化の敗者」である「不可視のフランス」へのFNの浸透を可能にしている [Ivaldi 2017 : 109]。産業の転換とグローバル化は衰退する旧産業都市と地方都市、農村部といった生活と雇用の困難に苦しみ不安を深め、無為無策に映る既成政党・政治家への不満と不信を高める有権者は、FNに現状打破への希望を託している⁽¹²⁾。

「文化的リベラル」と「文化的権威主義」－文化をめぐる分断

FNの台頭に関して、社会の外部への「開放」と「閉鎖」というグローバル化がもたらした対立軸の重要性を確認したが、同様に文化的対立軸も右翼ポピュリズム政党の伸張にとって重要である。多民族・多文化的社会やリベラルで平等な価値をめぐる違和感や反発も、FNへの共鳴を生み出している⁽¹³⁾。

1992年にP・イニャーツイ (Piero Ignazi) は、右翼ポピュリズム政党を「静かなる反革命 (silent counter-revolution)」と性格づけているが、両性の平等や生活の質、性的・民族的マイノリティの擁護などを主要な争点とする「静かなる革命 (silent revolution)」(R・イングルハート) に対する反動としてそれが登場していると指摘している。ニュー・ポリティクスのリベタリアンの軸に対して、法と秩序への関心、権威の厳格な遵守、マイノリティへの非寛容、伝統的習俗や価値への愛着を内容とする権威主義の軸が形成されている [Perrineau 2012 : 172]⁽¹⁴⁾。脱物質主義的価値観とリベラルな文化の広がり背景とする新しい社会運動の広がりには、緑の党のような新しいタイプの政党を誕生させた⁽¹⁵⁾。

かくして、異質なものへの寛容や対外的開放を指向する文化リベラリズムの立場と文化的同質性と国民共同体への自閉を称賛する権威主義的立場が新しい対立軸として浮上した [Perrineau 2014 : 142]⁽¹⁶⁾。

例えば、2012年の大統領選挙を例にとれば、緑の党の候補エバ・ジョリ (Eva Joly) とマリーヌへの投票者を比べてみると、マリーヌへの投票者では60%が死刑復活に賛成しているが、ジョリへの投票者では84%が反対である。学校教育で批判的精神をもつ人々を育てるという方針にもマリーヌ投票

者の23%しか賛同していないが、ジョリ投票者では91%が賛成している [Perrineau 2014 : 142-143]。マリヌとジョリを支持する有権者の対照的な考え方に文化や価値観をめぐる亀裂が表現されている⁽¹⁷⁾。

新党首マリヌの下で、女性の中絶や性的マイノリティの権利に寛容なイメージが振りまかれているが、FNの価値観や理念は本質的には変わっていない。現在でもFNは文化的リベラリズムに非寛容な政党であり、ナショナリズムをイデオロギーの基調としている⁽¹⁸⁾。

文化的分断はFNに権威主義的有権者の支持を調達する可能性にしている。社会と文化の分断は、リベラルで進歩的な価値観を身に着けた比較的豊かな社会層と「労働者階級の権威主義」(リプセット)を身に着けた社会層の投票行動の違いをもたらしている。後者の場合、多くの有権者は棄権を選択するか、右翼ポピュリズム政党への投票に向かっている⁽¹⁹⁾。

国境を越えるポピュリズムの波—「閉じた社会」への誘惑

FNの台頭は一国的現象でないことも重要である。そのことは、フランスを超えて右翼ポピュリズム現象が広がる条件が存在することを意味している。つまり、マリヌ現象は国境を越えた経済社会の変容が政治変動に結びついたものであり、その意味でFNはグローバル時代の新しい右翼である。

21世紀に入り、ポピュリズム現象は先進諸国に広がり、西欧の最も豊かな国々でも右翼ポピュリズム政党の活動が活発化している。英国独立党(イギリス)、「ドイツのための選択肢」(ドイツ)、「北部同盟(後に『同盟』と改名)」(イタリア)、「自由党」(オーストリア)、「国民同盟」(スイス)、「自由党」(オランダ)、「真のフィンランド人」(フィンランド)、「フラームス・ペランフ」(ベルギー)などの新しい右翼政党が次々と勢力を伸ばし、多くの国で15-30%の得票を獲得している。

特に、英国独立党、オランダ自由党は、2014年の欧州議会選挙で第1党に躍り出ている(後に英国独立党は後退)。また、これまで右翼政党が弱体であったドイツ、フィンランド、スウェーデンでも勢力を拡大している。各国の新しい右翼政党は、ポピュリズムの手法を駆使することで支持を拡大するという共通点を示している。そして、右翼ポピュリズム化した極右政党は、

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
欧州レベルで連携の動きを見せている⁽²⁰⁾。

その後もアメリカのトランプ政権が誕生し、2017年総選挙で「ドイツのための選択肢」が台頭するなど、自国優先や移民排斥の主張はグローバルな広がりを見せている。

急速なグローバル化を背景に、右翼ポピュリズム現象もグローバル化しているが、そこには2つの要因が働いている。一つは、グローバル化の加速である。その結果、社会と経済の安定と安全はますます脅かされ、政府に対する保護の要求が高まっている。それだけに、製造業の空洞化や地域社会の衰退、移民・難民の大量流入といった問題に有効に対処できないことから、既成政党・政治家を始めとしたエリートに対する不信と不満が拡がっている(第6章参照)。そして、それを糧として右翼ポピュリズム勢力が伸張している⁽²¹⁾。

もう一つは、9.11事件の影響からイスラム世界への拒絶と敵意が高まっていることである。それを背景に、一見リベラルに見える立場からのイスラム文化やムスリム系移民を攻撃する論理が、右翼ポピュリズム政党の反イスラムのレトリックとして利用されている。「共同体主義」や女性差別を否定する立場を強調し、西欧文明の擁護者として自己を提示することで、右翼ポピュリズム政党の排外主義的で差別的な主張が正当化されている [Ignazi 2012: 53-54]。

国境を越えたポピュリズム現象の拡大が、有権者から右翼ポピュリズム政党への違和感や忌避感を緩和し、投票行動に影響を与えていることは否定できない。FNは、そのような国際的文脈から利益を得ると同時に、そのような流れを牽引もしている。

FNの「大きな物語」一何を取り戻すのか？

長らく政治の場では、理想の社会の実現を説く「大きな物語」が人々を魅了してきた。その典型が、額に汗して働く労働者が主人公の「階級なき平等な共産主義社会」という「大きな物語」であった。理想の社会を建設するために、革命の動乱のなかで、あるいは、粛清の嵐のなかで、「大きな物語」を信じた膨大な数の人々が命までも投げ出してきたことか、そのような物語

の力を証明している。「大きな物語」は左翼の独占物ではなく、ファシズムも民族国家の再生と純化という壮大な物語によって、熱狂と戦乱のなかで多くの命を奪ってきた。

時代は流れ、共産主義の「大きな物語」は冷戦の終焉のなかで最終的に潰え、国内とEUレベルで新自由主義の考えに沿った政治が支配的になった。EUでは無味乾燥な「非政治化」が支配する反面、国境を超える連携と共同の実験という「大きな物語」が人々の希望を掻き立てた。だが、それも行き詰まり、時代は「大きな物語」なき時代に突入している。

憲法学者で中道政党UDFの国民議会議員であったP・アルベルティーニ(Pierre Albertini)は、フランスが経済的に豊かで、高度の社会保障が整った国であるにもかかわらず、ペシミズムが支配していることを指摘している。そこからある種のノスタルジーが人々を捉え、危機「以前」の時代を懐かしがる感覚を生み出している。理想化された過去は、完全雇用、購買力の継続的上昇、青年の社会的上昇移動、都市の犯罪や郊外での「非礼(incivilité)」もない平和な社会として描かれている[Albertini 1997: 14]。

アメリカ大統領選挙で、自動車や鉄鋼などの製造業が衰退した地域である「ラストベルト」の住民たちの支持がトランプ勝利の要因となったが、多くのトランプ支持者が語っていたのは、経済的に繁栄し、犯罪も少なく秩序が安定し、白人が圧倒的多数派であった「20世紀のアメリカ」へのノスタルジアであった。そのような支持者の「アメリカン・ドリーム」の時代を懐かしむ思いに、トランプ大統領は「偉大なアメリカを取り戻す」という「大きな物語」で応えたのである[金成 2017]。

FNも有権者に独特の「大きな物語」を振りまき、失われた古き良き懐かしい時代への回帰という願望をくすぐっている。それは、国の内外のエリートによって破壊される以前の社会への回帰である。

つまり、戦後の安定した経済と社会へのノスタルジアに対応した物語である。1980年代以降、グローバル化と脱産業化によって西欧社会は大きく変貌してきた。国民国家の枠組み内で持続的な経済成長と物質的繁栄、福祉の充実と生活の向上、安定した社会秩序、同質的な国民文化が確保された時代へのノスタルジアが人々を捕えている。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム—フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

だが、そのような時代は過ぎ去り、不安定で予測不可能な経済と社会のなかで生きる有権者に、FNは安定と繁栄の過去への回帰というメッセージを送っている。経済が繁栄し、失業や犯罪が少なく、移民・難民が多過ぎない、国民国家が確固とした存在感を示し国民を保護していた時代への回帰、国民の同質性と文化的独自性の回復という物語である〔畑山 2007:195-201〕。

吉田徹は『ポピュリズムを考える』のなかで、新自由主義と個人主義を潜り抜けた社会で「劇場化」を通じた新たな「大きな物語」への欲求が継続していることを指摘している〔吉田 2015:212〕。政治が経済の要請によって支配され、テクノクラートが政治を無味乾燥な「小さな物語」の集積に変えているとき、メディア化と劇的な演出の影響もあって、国民の間では「大きな物語」への欲求が高まっている⁽²²⁾。

そのような時に、国民国家の主権と国民の雇用と生活を取り戻すことを掲げてポピュリズム政党が「大きな物語」を紡ぎだし、一部の有権者は「失われた過去への回帰」という物語に魅了されている。

(3) ポピュリズムの時代の中で—ポピュリズム化する極右

現代の先進国では、ポピュリズム現象が拡大しつつある。民主主義の政治が脅かされ、揺らいでいるように見える。政治が行き詰まる中で、既成政党への不満と不信が高まり、左右両翼からポピュリズム政党が登場し、政党システムにおいて勢いを増しつつある。特に、政治的ベクトルの最右翼に位置する極右政党がポピュリズム化することで党勢の目覚ましい拡大を見せている。

「基本的枠組み (master Frame)」としての FN

グローバル時代のなかで、ポピュリズム現象は先進社会に広がっているが、その風はヨーロッパでも吹き荒れている。1980年代前半にFNは移民問題を前面に掲げるポピュリズムの手法を駆使して、他国に先駆けて選挙で躍進を遂げた。その後は低迷期も経験しながら、ポピュリズム的な宣伝・扇動を一貫して展開してきた。その意味で、FNは右翼ポピュリスト政党にとって「基本的枠組み (master Frame)」であり、反移民・難民、反グローバリズム・

反EU, 反エスタブリッシュメントなどの争点の土台を提供してきた [Ivaldi 2016 : 117]。

国民の境界の確定と差別化, 国民共同体とは異質な存在の排除 (「再国民化」) に向かうと同時に, 国家の役割の強化や主権の回復を求める主張 (「再国家化」) が顕著になっているが [石田 2016 : 43-44], そのような風潮を背景にナショナリズムと反共主義を掲げてきた極右政党は, ポピュリズム的手法を展開することでポピュリズム政党へと脱皮してきた。

FNは, ナショナリズムを基調としたポピュリズムの主張 (反移民・難民, 「自国民優先」, 反グローバリズム・反EU, 国民主権の奪還, 国民的アイデンティティと文化の回復) を掲げ, 民衆を苦境に追い込んでいる責任者として既成政党やエリートを糾弾するポピュリズムの「基本的枠組み」を確立し, 他国の右翼政党に影響を与えてきた。各国によって相違点もあるが, 欧州の右翼ポピュリズム政党はFNと多くの共通点を示している。その意味で, FNは右翼ポピュリズム政党の「基本的枠組み」といえるが, この節ではその具体的内容を確認しておこう。

新しい対立軸への適応—極右から右翼ポピュリズム政党へ

1990年代のフランスは「上か下か」, 「右か左か」, 「内か外か」, 「親欧州か反欧州か」という4つの対立軸が重層的かつ複雑に絡み合い, 場合によってはオーバーラップするという状況になった [小田中 2018 : 164-16]。FNは左右の対立軸では最右翼の位置を占め, 伝統的な極右政党として出発した。だが, 新しい対立軸が浮上するとFNは見事な適応力を見せた。欧州統合をめぐる対立軸ではFNは反EU的立場を鮮明にし, 上下の対立軸ではエリートに対して民衆的利益を守る姿勢をとった。内か外かの対立軸では移民受け入れに反対する排外主義的主張と国民の利益とアイデンティティを防衛する「自国民優先」の立場を掲げた。

極右政党として発足したFNは, 「内か外か」の対立軸では反移民の立場を鮮明にすることで泡沫政党から脱した。石油危機を転機とする低成長の時代と移民労働力の必要性低減, 大量の移民がもたらした弊害の顕在化によって, 1980年代には「内と外」の対立軸の影響力が高まるという状況から利益

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
を得ていた。反移民的な「自国民優先」の主張は有効性を発揮し、FNは多くの有権者を引き付け始めた。

1990年代にはグローバル化の影響力が本格化し、欧州統合のプロセスも加速していった。「親欧州と反欧州」の軸が有効性を高めると同時に、国民生活を犠牲にしてグローバル化と欧州統合を推進する内外のエリートに対する不満と反感を基盤として「上と下」の対立軸が有効性を高めた。FNはグローバルイズムと欧州統合を批判して、それを推進するエリートへの批判を強め、その犠牲者である国民の利益とアイデンティティの防衛を訴えることで「上か下か」の対立軸も有効に利用した。

新しい対立軸をめぐって、FNは「下」「反欧州」「内」という立場を貫いてきた。左右両翼の既成政党が「上」「外」「親欧州」という立場をとる中で、FNは「再国民化」と「再国家化」の立場から右からのオルタナティブとして存在感を高めていった。

対立の構図を「愛国者」と「グローバル主義者」として設定することで、マリーヌも「再国民化」と「再国家化」という処方箋を踏襲している [マリーヌ・ルペン 2019: 69]。

「再国民化」「再国家化」という処方箋

「再国民化」は、国境を越えて大量の移民が流入することで国民国家の同質性が脅かされ福祉国家の基盤が揺らいでいることから、国民の境界を確定・強化し、国民共同体を純化することを意味している。

21世紀に入り、大量の移民・難民の流入が問題となり、最近でもEUに押し寄せる難民の波は各国で選挙の争点となり、移民・難民の排斥を唱える政党が伸張する温床になっている [墓田桂 2016: 144-148]。FNは長年にわたり移民問題の争点を重視し、「移民による水没 (submersion)」 (=大量移民の流入によりフランス人が少数派に追い込まれること) の不安を煽り、国境の閉鎖、亡命申請者の送還、移民に対する社会権の廃止を求めてきた [Ivaldi 2016: 120]。

つまり、FNは「再国民化」の処方箋、具体的には、国境の強化、福祉供給の国民への限定 (「福祉排外主義」)、国民的伝統・文化の保護、国民的ア

アイデンティティの強化といった政策を訴え続けてきたのである。

反移民・難民のイデオロギーは国民共同体の利益とアイデンティティの防衛に行き着くが、それは極右政党にルーツをもつFNにとって自然な経路であった。すなわち、ナショナリズムの思想は自国民の利益を優先する「福祉排外主義」に結実し、住宅や教育、雇用、社会的給付などの領域で自国民を優先する主張は、経済が低迷する中で右翼ポピュリズム政党の有力な武器になっている。経済成長率が落ち込み、財政赤字が拡大し、社会保障財政が逼迫する中で、国民には福祉国家の負担が重くのしかかっている。そのような状況が移民・難民による「福祉ただ乗り」批判につながり、移民・難民の受け入れ制限とともに福祉を自国民に限定する右翼ポピュリズム政党の主張が支持を拡大している（第5章参照）。

「再国家化」の主張もグローバル化とEU統合の進展という文脈の中で有効性を高めている。マリーヌは「主権なしにアイデンティティも民主主義も存在しない」と明言している [マリーヌ・ルペン 2019: 13]。

経済のグローバルな展開とイスラム原理主義の拡大の元凶であるグローバル化と官僚機構の怪物であるEU統合が進展するなかで [マリーヌ・ルペン 2019: 44-45, 95]、国家の主権的権限と能力は縮小し、国民はかつてのように国家に保護されなくなっている。そのような文脈において、国家主権をEUから奪還することで、国民の生活と雇用を防衛する国家の役割を再強化することを求めるFNの「再国家化」の主張は有権者の間に共感を広げている（第6章参照）。

そして、2015年に相次いで発生したテロ事件は移民・難民への不安を煽り、国家によるテロとの闘いの強化を訴えるFNへの支持を拡大している。FNは以前から、「文明の闘い」の文脈でイスラムの危険性を説いてきた。新世紀に入り、イスラム原理主義団体による各地でのテロの頻発や、「イスラム国 (IS)」という新たな脅威によって反イスラムの感情は高まっているが、FNが展開してきた反イスラム・反テロの宣伝・扇動が有効性を高めている。

グローバル化の時代に、国民国家の主権と国境を回復し、国民の利益とアイデンティティを防衛し、経済の繁栄と安全な社会を取り戻すというFNの「再国民化」と「再国家化」のメッセージは、多くの有権者に浸透しつつあ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)る。

おわりに－「マリーヌのFN」とフランスのデモクラシー ポピュリズムは危険なのか？

ポピュリズムは、自由民主政の理念と体制における「不満と不安」の政治的表現であり、官僚支配へと「硬化」した代議制民主主義の「解毒剤」、あるいは、民主政の「復興運動」であるというポジティブな評価が存在する。他方では、それとは対照的に、自由民主政の「病理」と見なす見解も存在している [中谷 2017: 4]。

ポピュリズムを危険視する場合、そこにはエリート主義的視線、得体の知れない民衆的運動への危機感が読み取れる。これまで、ポピュリズムは情緒的で無知蒙昧な有権者の反乱であり、社会を混乱に陥れるものと非難されてきたが、そのようなポピュリズム観は、結果として、知識と教養を備え、冷静かつ論理的に思考することを肯定することで、エリート支配を正当化することに帰結する。

最近のイギリスにおけるEU離脱をめぐる国民投票やアメリカ大統領選挙でのトランプ候補の当選をめぐって、そのようなポピュリズム観が見られる。経済的利益を合理的・冷静に判断すれば、EUからの離脱は合理的な選択ではないという言説が英国では溢れていた。日本でも経済の研究者や専門家は口を揃えて、合理的に思考するなら離脱は愚かな選択であると大合唱をしていた。

アメリカの大統領選挙でも、トランプ候補の感情的で非論理的な演説と、それに呼応する熱狂的で情緒的な有権者の姿がポピュリズムの政治として報道され、冷静で論理的なヒラリー・クリントンの演説と、それを支持する大都市部の人権や反差別を唱える教養ある有権者といった対照的な構図が描かれていた。

果たして、ポピュリズムは病的現象で、デモクラシーを脅かすものであるのか。確かに、ポピュリズムは「異なる他者」を排斥する言説を駆使し、国民投票による直接民主主義を掲げる反議会制民主主義の主張も展開している。そこに「立憲主義的自由民主政」との乖離を見ることは可能である [中谷

2017: 10-11]。

民衆の熱狂と喝采をエネルギーとし、強力な指導者が暴走して民主主義の制度や価値を踏みにじる危険性は否定できない。だが、ポピュリズムには現代デモクラシーの機能不全を知らせるリトマス試験紙の役割もある。

クラウチの『ポスト・デモクラシー』には、先進社会におけるデモクラシーの現在が批判的に描かれている。その著書の「前書き」は、1990年代後半に先進工業国の大半で起きている現象の指摘で始まっている。「どんな政党が政権に就こうと、国の政策には富める者の利益になるように一定の圧力が継続的にかけられる。規制なき資本主義経済から保護を必要とする人々ではなく、むしろ恩恵を受ける人々の利益が優先されるのである」。

政治も政府も特権エリートの管理下へと退歩し、平等主義の大義は無力さを増している。見世物的な選挙ゲームの裏で、選出された民主主義的政府と徹底して企業の利益を代表するエリートたちの交渉によってひそかに政策は形成されるという事態に近づいている、というのがクラウチの現代デモクラシーについての診断である [クラウチ 2007]。

政治から市民が実質的に排除される「民主主義の赤字」の状態は、EUのみならず国家の政治にも広がり、エリートは普通の人々の考えることに関心を持っていない、人々の生活よりも企業や経済の利益が優先されているという不満につながっている。そのような不満と不信の土壌にポピュリズムが芽を出し、葉を茂らせている⁽²³⁾。

問題はポピュリストなのか？

であるならば、問題はポピュリズムにあるよりは、それを生み出しているデモクラシーの現実の方にある。デモクラシーが一握りの官僚や政治家たちの支配のための制度へと劣化し、民衆の生活や人生を破壊しているにもかかわらず、政党や政治家が民衆の苦悩や不安に鈍感になり、その声が政治に届かないとき、民主主義社会ではどのような行動が可能であるのだろうか。諦めて棄権に走るか、街頭での抗議運動か、あるいは、エリート支配を告発する政党に一票を投じるしかない⁽²⁴⁾。

大人しく棄権を選択することはいいが、街頭での抗議運動とポピュリズム

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

政党への投票行動は、既成政党・政治家によってデモクラシーを脅かすものとして非難される。街頭での抗議運動は、一部の暴力的な逸脱行為への非難に置き換えられ、ポピュリズム政党への投票行動は危険視されてきた⁽²⁵⁾。

既成政党・政治家にとって、問題はポピュリズムではなく、その台頭をもたらす経済社会の現状にあり、その台頭の責任はそれを放置してきた自分たちの側にあるという認識は欠如している。

EU 統合についても、民衆の憤りと怒りは、競争力の強化や企業収益の向上を優先して国民の生活や雇用の改善を等閑視してきたことに向かっている。ポピュリストの EU 批判は、何のための、誰のための欧州統合なのか、誰がどのように決めているのかといった、本質的問題を突いている。その意味で、EU 統合にとって、ポピュリズム政党の批判は有益なものである。

根本的な問題は、ポピュリズム現象の危険性ではなく、政権を担う政党・政治家が有権者の抱える諸問題を理解し、有効に対処できるのかという点にある。

「マリーヌの FN」は危険な政党なのか？

本稿では、2011年に父親ルペンの後継者として党首に就任したマリーヌ・ルペンの個人的な生い立ちや人物像から党のイメージ転換（「脱悪魔化」）、移民問題やグローバル化、EU 統合、イスラムとテロといった争点を通じたポピュリズム路線の継承、そして、その成果としての党勢の回復・伸張といった多様な側面から、「マリーヌの FN」を分析・考察してきた。

現在のフランスは多くの深刻な課題に直面しており、その解決法の有効性と実現可能性はともかく、FNは有権者が抱える困難と不安を機敏に察知し、それを宣伝と扇動の核に据えてきたことは確かである。現在でも、危険な極右政党として多くの有権者に忌避されていることは確かであるが⁽²⁶⁾、既成政党・政治家を始めとしたエリートを批判する FN の言説が支持を拡大していることは明らかである。

前述したように、「マリーヌの FN」は「ルペンの FN」と多くの連続性を示している。だが、マリーヌのもとで「新しさ」が演出され、極右イメージの緩和・払拭と「普通の政党化」が進められてきた。

果たして、「マリーヌのFN」は政党システムの一員として、民主主義にとって危険な存在でなくなったのだろうか。

FNが政権を掌握したときの実験場である自治体での市政運営を見てみると、1997年統一地方選挙でオランジュヤトゥーロン、マリニャヌといった自治体でFNは市政を掌握した。その時、FNは「政権担当能力」を誇示し、「理念の実験室」として意気込んで自治体経営に乗り出したが、「異端排除」の非寛容な姿勢を露呈してしまった[畑山 1995a : 136]。

時代は過ぎ、2015年の統一地方選挙で、FNは11の自治体で市政を掌握した。その中には、マリーヌが拠点とするエナン・ボーモンも含まれているが、その自治体運営が紹介されている[『朝日新聞社『Globe』No.194(2017年6月)]。エナン・ボーモン市の副市長は、ムスリム関連の予算は削減されていないし、モスク建設も予定通り認可されていると語っている。「大人になったFN」と形容したいような変化で、FNの市政運営は堅実で穏健なイメージに変わっている。

国政レベルとは同一視できないにしても、少なくとも自治体レベルでは「マリーヌのFN」は慎重な政権運営に努め、デモクラシーの枠組を尊重しているかのように見える。

国政についていえば、他国での右翼ポピュリズム政党の政権参加が参考になる。これまで、先進社会ではオランダやイタリアなどで右翼ポピュリズム政党は政権入りを果たしている。特に、オランダにおける政権参加は先進社会で衝撃を広げたが、結局、右翼ポピュリズム政党は内紛から分裂に至り、政権参加は党にマイナスの効果を与えた。制度への参加を通じた影響力の拡大という路線を選んだ右翼ポピュリズム政党は、その制約に縛られることになった。先進社会の民主主義の抵抗力と自己維持能力は、右翼ポピュリズム政党も簡単には崩すことはできないだろう。

フランスに限っても、2017年大統領選挙に見られるように、共和制とデモクラシーの伝統と国民的コンセンサスは、極右の過去をもつ政党をそう簡単に政権に就かせることはなかった。また、FNが政権に参加することになったとしても、共和制とデモクラシーの枠組みは尊重せざるを得ないだろう。

考えてみれば、FNは共和制やデモクラシーの価値や制度に適應すること

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
で「普通の政党」として認知されることを追求してきた。それは、共和制とデモクラシーへの国民的コンセンサスが強固であることを示している。

他方、FNが民主主義にとって危険性を孕んでいることも否定できない。FNがエリートに対峙する均質的で一枚岩の「人民」を前提とし、多様性を認めない「反多元主義」の性格を持っていることも確かである〔ヴェルナー・ミュラー 2018・11〕。

斎藤幸平は、議会制民主主義の機能不全と過去へのノスタルジアに依拠した政治主導体制が国難レベルの危機と直面した場合に、愛国主義的で、強権的な独裁体制に変貌してしまう危険性を指摘しているが〔ガブリエル、ハート、メイソン 2019：39〕、フランスもそのような危険性を免れてはいない。

「マリーヌのFN」の限界と可能性

マリーヌの党首への就任によってFNは低迷期を脱し、2017年大統領選でも台風の目になった。だが、政権に参画するマリーヌの目標は、少なくとも現時点では実現は難しい。確かに、2017年大統領選挙の第1回投票を突破し、決選投票では2002年のルペン票を大きく超える33.94%を得票した。

FNは、民衆層の利益代弁者として一定の成功を収めていることは確かである。十八番である移民や治安といったテーマの集票効果、イスラムとテロに対する世論の硬化、既成政党とエリートへの不信と不満の高まりといった、FNに有利な環境は存在しつづけている。「脱悪魔化」の効果と相まって、それらの要素がマリーヌへの投票を膨らませたことは否定できない。

だが、それでも過半数の壁は遥かに高い。続いて実施された国民議会の第1回投票で13.26%の得票に終わっていることを加味すれば、FNの限界は決定的である〔田端 2017 95-96〕。少なくとも2017年の時点では、FNに対する忌避感・反感が払拭できていない。

ただし、今後のフランス政治の展開によっては、FNへの支持が更に膨らみ、次期の大統領選挙でマリーヌが過半数を制する可能性もある。

それは、「脱悪魔化」の努力、理念や政策の充実、地方での勢力拡大と組織の整備といった主体的取り組みとともに、政治不信の高まり、とりわけ、マクロン政権への有権者の不満と不信の高まりといった客観的条件が、FN

への支持を拡大する可能性はある。

イギリスでEU離脱の国民投票で、地方の民衆の社会層による反乱が予想外の結果を生み出す原動力になったように〔ブレイデイ 2017: 49〕、マクロン政権への民衆層の反感と不満が予想外の結果につながることはありうる。

その兆候はすでに表面化している。マクロン政権の支持率は急落し、大統領の退陣を求める「黄色いベスト」運動が地方居住者を中心に盛り上がりを見せている。フランス各地でデモや道路の占拠が繰り返され、運動が下火になっているとはいえ、現在でも直接的な政治参加を通じて地域社会と生活、雇用の劣化に対する抗議が繰り返されている。

棄権層の増加と右翼ポピュリズム政党への投票、「黄色いベスト運動」による社会運動は現行の政治への抗議であると同時に、代表制と民主主義のエリート支配への劣化に対する異議申し立てであるといえる〔尾上 2019: 160-167〕。

再度繰り返すが、問題はフランス政治と民主主義の現実に不満と不信を持つ有権者ではないし、FNや「黄色いベスト運動」でもない。民主主義の主役が主権者である限り、その声が政治に反映されることを求めるのは当然のことである。そうである以上、ポピュリズムの問題は民主主義の課題でありつづけている〔川村 2017: 44〕。

問われているのは、既成政党・政治家が有権者の声に耳を傾け、積極的に対応する姿勢を見せることである。ポピュリズムの台頭が民主主義の脅威になっているのではなく、民主主義への信頼の低下がポピュリズムをのさばらせているとすれば〔ヤシャ・モンク 『朝日新聞』(2018年11月7日)〕、政治と民主主義への信頼回復が何よりも急務である。

フランスでも同様に、問われているのはマクロン政権と民主主義の応答性と問題解決能力である。社会的格差と貧困の拡大、地方の衰退、雇用の悪化、移民・難民問題、EU改革、地球環境問題など、フランスの民衆から突き付けられている課題は山積している。民衆の声を政治に反映させ、積極的に改革を進める姿勢と覚悟を示さない政治がづくなら、これからも左右のポピュリズム政党を勢いづけることになるだろう。ポピュリズムの時代は、民主主義の真価が問われる時代でもある。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

*本稿は学術振興会科学研究費助成金(基盤研究C, 課題番号16K03475)による研究成果の一部である。なお、「国民戦線(Front national)」は2018年6月に「国民連合(Rassemblement national=RN)」に改名したが、本稿では、執筆開始の時点での名称である「国民戦線(FN)」を使用している。

注

- (1) 2010年9月17日に世論調査機関IFOPが実施した調査では、62%が左翼－中道－保守の分類軸上に自己を位置づけているが、33%は「右でも左でもない」と回答している。3分の1の割合をどう見るかは微妙であるが、18-24歳では「右でも左でもない」という回答が52%に達している。若い年代ほど、伝統的な左翼と保守の対立構図に囚われていない。2011年6月に実施されたオピニオン・ウェイ研究所(l'institut Opinion-way)の調査でも、「左翼と保守という考え方は時代遅れ」という回答が59%、左翼と保守の分類は「政党や政治家の立ち位置を理解するために今日でも有効」という回答は40%であった。1981年には同じ設問に対する回答は33%と57%であり、左翼と保守の対立軸が希薄化していることが理解できる[Perrineau 2012: 19]。
- (2) 他にも、サルコジは福祉排外主義にそった次のような発言もしている。「税金を払い続けたのに少額の年金しか受給していない農民の寡婦より、60歳でフランスにやって来た誰かの方が多額の年金を受け取れるのは正常なことではない」(2012年3月6日)[Mandon 2013: 173]。
- (3) そのような現象はフランスだけでない。例えば、オランダでも右翼ポピュリズム政党党首ヘルト・ウィルデルスの反移民、反イスラムの主張が、既成政党・政治家によって取り込まれ「主流化」している現実が指摘されている[水島 2017a: 204-205, 209-210]。
- (4) 1993-1995年に内務大臣を務めたCh・パスクワ(Charles Pasqua)は国籍法、移民の管理、外国人の入国と滞在に関する法律を制定し、J・シラク(Jacques Chirac)も2002年大統領選挙に際して、左翼の寛大な治安政策を非難して「寛容ゼロ」を主張した。同大統領選挙では治安問題が最大の争点になり、社会党候補L・ジョスパンも治安政策の強化を訴えた。2007年大統領選挙でも、FNの主張が選挙の重要な争点となり、サルコジは犯罪の重罰化、家族合流の制限、「移民・国民的アイデンティティ共同開発省」の創設を提案した。サルコジは、大統領就任後の2009年には国民的アイデンティティについての論争を組織し、2010年には公共の場でのブルカの着用禁止を法制化した[Bréchon 2012: 167-169, 東村 2019]。
- (5) サルコジが推進した国民的アイデンティティをめぐる議論であるが、マリーヌのアドバイザーであるPh・オリヴィエ(Philippe Olivier)は「そのテーマがFNを蘇生させた」と証言している。FNには国民的アイデンティティについてのメールが大量に届

き、党員数が4万5千名に増え、党員数の記録を塗り替えている。党員の増加にとっては、FNの主張が正当化された効果も無視できない[Machuret 2012: 104-105, Mandon 2013: 185-6]。

- (6) FNは政党システムで孤立を余儀なくされてきた。その結果として、FNは完全野党の立場をとってきた[Bréchon 2012: 166, Dézé 2012: 108-109]。マリヌの戦略は保守政党を分裂に追い込み、保守も含めて主権主義勢力を巻き込んで政界再編を起こすことであった[Rosso 2011: 284]。究極的には、FNは左翼と保守の伝統的な対立構図を突き崩し、FNを中心とした「愛国者」勢力と「グローバリスト」勢力への政界再編を期している[Crépon 2012: 239]。

具体的には、保守主権主義者P-C・クトー (Paul-Marie Couteaux) の「フランスの独立のための結集 (Rassemblement pour l'indépendance de la France)」との連携に期待していた。というのは、クトーはFNから左翼まで「全ての愛国的運動を結集させる選挙連合」の形成を唱えていたからである[Fourest et Venner 2011: 446]。だが、クトーとの連携も期待外れに終わり、保守勢力の取り込みは思惑通りには進んでいない。

- (7) 保守支持者にもFNとの連携を受容する傾向が見られる。2012年1月に実施されたTNS-SOFRESの調査によると、保守支持層のFNへの姿勢に変化が見られる。UMP支持層の45% (国民平均では32%) が、FNとの連携の可能性を認めている。2017年の調査(SOFRES)でも、共和党支持者の31%はFNとの協力を賛成であり、7%は「FNを同盟者として扱う」ことを求めている。合計で38%がFNとの連携を支持する態度をとっている[Le Gall 2017: 43-44]。

- (8) 社会党の支持基盤であった労働者層は、FNによって浸食されている。FNを支持する労働者の割合は1986年の国民議会選挙では11%であったが、1988年大統領選挙19%、1995年大統領選挙30%、2002年大統領選挙26%、2014年欧州議会選挙45%と大きく増えている[譚 2017: 183]。

2017年の国民議会選挙第1回投票でも、社会党は事務職では12% (共和国前進28%, FN18%, 共和党17%, 「不服従のフランス」12%)、労働者では12% (同28%, 22%, 14%, 13%) と、民衆層で苦戦している。また、上級管理職では「共和国前進」41% (社会党10%)、中間管理職33% (同11%) と、相対的に恵まれた職業層は社会党ではなく共和国前進を選択している[Chiche et Boy 2017: 164-165]。

- (9) マリヌが拠点に選んだノール＝パ＝ド＝カレ県は旧産炭地で、産業活動の衰退によって「悲惨とボタ山が残された地域」であり、そこでは、学校教育からの脱落、アルコール依存症、失業、肥満、貧困、産業空洞化といった現象が見られる。同県では1960年代から社会党、共産党が支配してきたが、マリヌは、左翼は社会的平等、連帯、女性の権利、共和制の価値を裏切ってきたと批判している[Marine Le Pen 2006: 196-197]。FNは社会的不平等や貧困との闘い、すなわち、左翼がこれまで担ってきた闘いを継承しようとしているかのようである。マリヌは社会党のシンボルであるJ・ジョレス (Jean Jaurès) の名をあげて、「国民の防衛を放棄して、個人主義の名のもとに全てのマイノリティの擁護者になり、セクト化し、断片化してる」(『ボワン』誌 (2011年2月

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完
3日号)と左翼を非難している [Corbière 2012 : 97-98]。

- (10) 近年の FN は大都市部で低迷している。2012年と2017年の大統領選挙でも全国的には伸張しているが、パリやリヨンといった大都市部では苦戦している。反対に、民衆の性格の強い人口3500人以下の小規模自治体での得票は、1984年には9%であったが、2017年は25.8%と大幅に伸張している [Le Gall 2017 : 41] (表8-2参照)。

表8-2 自治体の人口規模によるマクロンとルペン票 (%)

自治体の人口規模	マクロン	マリーヌ
1000人以下	57.0	43.0
1000-3500	60.7	39.3
3500-9000	59.0	41.0
3500	63.3	36.7
9000-30000	67.6	32.4
30000-100000	72.5	27.5
100000人以上	79.5	20.5
本土	66.1	33.9

出典：[Le Gall 2017 : 51]

- (11) ただし、近代化の「敗者」のなかで「企業と社会モデルに脅威を与えるのでグローバル化は危険」(74%)「EUへの加入はフランスにとっていいこと」(32%)、「保護主義は『ポジティブな』言葉」(64%)という回答から、現行のグローバル化に反対であるが欧州統合自体には反対でなく、理想のEUへの改革を支持しながら、当面は保護主義による国民の生活と雇用の改善を望むメランションの考え方を支持する民衆の支持者も多く含まれていると考えられる。また、「フランスには移民が多すぎる」という回答が57%であることは、排外主義的意識を持たない「敗者」も多く含まれていることも示している。
- (12) マリーヌは2017年大統領選挙の数年前から農村部や小規模自治体に注目し、「忘れられた人々のフランス (France des oubliés)」への戦略的配慮を打ち出していた。その象徴的な例が2012年大統領選挙でのオート・マルヌ県にある住民63名の村ブラシェ (Brachay) でのキャンペーンのキックオフであった。そのような配慮は効果を発揮し、3,500人以下の小規模自治体では、2002年大統領選挙14.3%、2012年21%、2017年25.8%と一貫して得票を伸ばしている [Le Gall 2017 : 41]。
- (13) これまで経済での成功を土台に文化的ヘゲモニーを掌握してきた社会の多数派(男性・白人を核に形成されてきた中間層)に対する「文化的バックラッシュ」「静かなる反革命」が生じているが [吉田 2017 : 66]、FNは文化的リベラリズムに敵対的な姿勢をとることで、排外主義的で権威主義的な傾向の有権者から支持を調達している。
- (14) ポスト産業社会では社会的・宗教的帰属によって構造的に固定されてきた「クリーヴィッジ投票」は後退し、投票行動は流動化している。例えば、労働者が「階級的帰属」

- に基づいて左翼政党に投票する傾向は弱まり、右翼ポピュリズム政党が第1党になっている。また、先進社会では、教育レベルの向上や世代交代によって普遍的でリベラルな価値観が高学歴層に広がり、その社会層が新左翼やエコロジー政党を含めて左翼の支持基盤となっている。それに対して、低学歴層はリベラルな価値観に反発して権威主義的で排外主義的な傾向を強めている。経済的次元での左翼と右翼の対立軸に加えて、権威主義とリバタリアンという文化的対立軸が重要性を増している [Mayer 2012: 144]。
- (15) 緑の党は、脱原発やフェミニズム、性的・民族的マイノリティの権利、環境保護、公共交通の充実、第三世界との連帯、労働時間短縮による自由時間の拡大といった新しいテーマに取り組み、ヨーロッパの多くの国では国政議会に参入し、フランスやドイツでは政権参加も果たしている (畑山 2012, 小野 2016)。
- (16) 戦後の経済社会秩序が行き詰まったときに、それを打開すべく登場する「新しい政治」にはエコロジー政党だけではなく、新しい右翼と新自由主義を推進する新保守主義も包含することができる [丸山 2000: 16-18]。新保守主義は産業主義と科学技術主義に立脚する経済成長の政治をグローバル化の枠組みのなかで究極まで追求し、政治的エコロジーは脱物質主義と文化的リベラリズムを基盤とし、新しい右翼は権威主義とナショナリズムに依拠して登場するが、それらは「古い政治」の危機を乗り越える試みいえる。新しい右翼の政治空間における位置づけと「新しさ」についての議論は [丸山 2000: 15-18] を参照。
- (17) トランプ大統領を誕生させたアメリカについても同様の指摘がされている。1970年代以降には、女性や移民、障害者などをめぐる差異の政治的・社会的構築を指向する「文化的左翼」が影響力を高めた。その結果、現状批判の軸足は経済から文化に移され、グローバル化による経済的不平等や不安が軽視される傾向が見られる。既成政治が経済社会的課題に有効に対処できないなかで、「プロレタリア化」が進行する白人労働者と民衆層に右翼ポピュリズムが浸透していった [吉見 2018: 15-20]。
- (18) 新党首の下で文化的リベラリズムを受容しつつあるかのように見えるが、FNは基本的に右翼権威主義の政党でありつづけている。マリヌは女性や性的マイノリティの権利擁護やモダンな家族観・女性観を身に着け、68年5月革命が切り開いた新しい発想や価値観に好意的であるように見える。だが、68年に生まれ、社会と道徳のリベラル化を経験しているマリヌであるが、68年5月の価値を全面的に肯定しているわけではない。それが促進した個人主義化がフランス社会の土台を揺るがし、個人の欲望が集団的利益に優先するようになったことを非難している。共同体主義の要求やホモセクシュアル同士の結婚、ブルカを着用する自由に帰結している点で、68年5月は「社会を破壊する出来事」であったからである [Fourest et Venner 2011: 180]。
- (19) 野田昌吾はドイツ政治をめぐる分析で、社会文化的亀裂の重要性について言及している。新しいライフスタイルやエコロジー、連帯と寛容を重視する都市部の特に高学歴の中間層や若い女性たちを基盤とする社会層と、社会経済的な意味で「近代化の敗者」「置き去りにされた人々」であるだけではなく、社会文化的意味でも「置き去りにされた人々」の分断を指摘している。そして、旧東ドイツ地域での「ドイツのための選択肢

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

(AfD)への投票行動を文化的リベラルな西側に対する「復讐」であると性格づけている〔野田 2018: 92-106〕。本稿でも、新自由主義と欧州統合による生活の悪化や格差の拡大を放置して、文化的リベラルな課題へと傾斜していった中道左派政党からの民衆層の離反と、その一部のFN支持への移行という、ドイツと同様の現象を指摘している(第6章)。

- (20) グローバル化を統御できないままに社会の困窮化を許容しているリベラリズムに対する「憤りの政治」が各国で噴出している。憤りの根底には、戦後デモクラシーの政治と経済を支えた基本的な枠組み-豊かさ(資本主義)と平等(民主主義)という両輪-の揺らぎがあると吉田徹は指摘している〔吉田 2017: 59〕。
- (21) 2014年のヨーロッパ議会選挙で24.9%を得票して24議席を獲得したFNは、同年10月には欧州規模での新しい右翼の運動である「国家と自由のヨーロッパのための運動(le Mouvement pour l'Europe des nations et des libertés = MENL)」を結成した。MENLには、FN(フランス)、自由党(オランダ)、北部同盟(イタリア)、フラマンの利益(ベルギー)、自由党(オーストリア)が参加し、FNは欧州議会で「国家と自由のヨーロッパ」という会派を結成して指導的役割を果たしている〔Ivaldi 2016: 115〕。
- (22) 有馬は、大衆民主主義のもとで「政治のメディア化」が本格的に進行するなかでポピュリズムが劇場型に向かい、劇的に見せる政治手法が駆使されていることを指摘している〔有馬 2017: 80-81〕。ポピュリズム政党のリーダーが体现する演技性や劇的性格も重要であるが、その政党なり運動が提供する物語性も人々を魅了する要素として無視できない。ポピュリズム的政治運動には、人々の希望を掻き立て、心躍らせる物語が必要なのである。
- (23) 例えば、既成政党・政治家は民衆のことに関心を持っていないし、彼らのことを考えてもいないという有権者の感覚は全く根拠がないものだろうか。犯罪や失業の増大、雇用の非正規化、社会保障の縮減、格差や貧困の拡大といった民衆が苦しみ、不安に駆られていることに、既成政党は真摯に向き合い、問題解決に取り組んできたのかは疑問である。
- (24) スペインやアメリカでのオキュパイ運動に参加する市民の行動を「カウンター・デモクラシー」(R・ヴァロン)と肯定しながら、右翼ポピュリズム政党の支持者には排外主義的でデモクラシーにとって危険な存在という烙印を押し、市民社会の亀裂を肯定する傾向がある。だが、いずれも既成政治への異議申し立ての現象であり、デモクラシーへの危険性を説くだけでは、リベラル・デモクラシーと代表制デモクラシーが抱える問題に目を塞いでしまいかねない、という野田昌吾の指摘〔野田 2018: 154-155〕は的を得たものである。
- (25) 確かに、現代のデモクラシーはポピュリズムによって脅かされる可能性は否定できない。ポピュリストが政権を掌握した場合、民主主義の手続きや価値が踏みにじられる危険性がある。だが、デモクラシーには抵抗力、あるいは、自己保存能力が備わっている。デモクラシーを脅かす一方で、ポピュリストたちはデモクラシーによって馴化され、制約されることになる。彼らの存在、彼らの言動が、デモクラシーによる試練にさらさ

れるのである。それは成熟した、本当の意味での民主主義国家であれば政権に参加したポピュリストが経験することであり、現にヨーロッパの右翼ポピュリスト政党が政党システムへの参入や政権参加を通じて、「既成政党化のジレンマ」[渡辺 2017: 136]を経験している。

- (26)「脱極右政党化」をめざすマリヌにとって一番の悩みの種は、父親ルペンによって繰り返される失言であった。そこにはルペンとマリヌの間に世代的な違いがあり、埋められない溝が存在していた。反ユダヤ主義と生物学的人種主義、歴史修正主義という極右と識別される発言をめぐって両者の齟齬は拡大していった。「人種 (race) 間の不平等」を肯定するかのような発言やユダヤ人の大量虐殺やドイツ占領を擁護するかのような発言を繰り返すルペンに対して、マリヌは歴史修正主義的発言を差し控え、「人種」ではなく「エトニー (ethnie)」という語を使っている [Fourest et Venner 2011: 63-65, Liszakai 2011: 85-86]。

参考文献

〈日本語文献〉

- 有馬晋作 (2017) 『劇場型ポピュリズムの誕生』 ミネルヴァ書房
- 石田徹 (2016) 「福祉政治における『再国民化』の言説 - 福祉ツーリズム, 福祉ポピュリズムをめぐって」, 高橋進・石田徹編 『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ - 新たなナショナリズムの興隆と移民排斥の行方』 法律文化社
- 井出季彦 (2009) 『移民のフランス - 「シテ」からみた大統領選挙 -』 西日本新聞社
- 植村邦 (2002) 『フランス社会党と第三の道』 新泉社
- ヴェルナー・ミュラー, ヤン (2017年) 『ポピュリズムとは何か』 岩波書店
- (2018) 「ポピュリズムの10年, これからの10年」 『Globe』 No. 211
- 遠藤乾 (2017a) 『欧州複合危機 - 苦悩する EU, 揺れる世界』 中央公論新社
- (2017b) 「フランスの『果て』への旅 2017年大統領選挙」 『Globe』 no. 194
- 大嶽秀夫 (2017) 『日本とフランス - 官僚国家の戦後史』 NHK 出版
- 小熊英二 (2012) 『社会を変えるためには』 講談社
- 長部重康 (1995) 『変貌するフランス - ミッテランからシラクへ』 中央公論社
- (2015) 「マリヌの勝利」 『日仏政治研究』 第9号
- 尾玉剛士 (2017) 「[フランス] - 巨大保守政党の結成, 右傾化戦略とその後の混迷 21世紀の動向」, 阪野智一・近藤正基編 『刷新する保守 - 保守政党の国際比較』 弘文堂
- 小田中直樹 (2018) 『フランス現代史』 岩波書店
- 小野一 (2014) 『緑の党 - 運動・思想・政党の歴史』 講談社
- 尾上修吾 (2018a) 『BREXIT 『民衆の反逆』 から見る英国の EU 離脱 - 緊縮政策, 移民問題, 欧州危機』 明石書店

- マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
- － (2018b) 『「社会分裂」に向かうフランス－政権交代と階層対立』 明石書店
 - － (2019) 『黄色いベストと底辺からの社会運動－フランス庶民の怒りはどこに向っているのか』 明石書店
- 金成隆一 (2019) 『ルポ トランプ王国 2』 岩波書店
- ガブリエル, マルクス・ハート, マイケル・メイソン, ポール (斎藤幸平編) (2019) 『未来への大分岐路－資本主義の終わりか, 人間の終焉か?』 集英社
- 川村仁子 (2017) 「デモクラシーの影のなかに－グローバル・ポピュリズムの可能性」, 中谷義和・川村仁子・高橋進・松下冽編 『ポピュリズムのグローバル化を問う－揺らぐ民主主義のゆくえ』 法律文化社
- 国末憲人 (2005) 『ポピュリズムに舐まれるフランス』 草思社
- － (2016) 『ポピュリズム化する世界』 プレジデント社
 - － (2017) 『ポピュリズムと欧州動乱－フランスはEU 崩壊の引き金を引くのか』 講談社
- 國廣敏文 (2017) 「フランスのポピュリズム－統合と排除の狭間で」, 中谷義和・川村仁子・高橋進・松下冽編 『ポピュリズムのグローバル化を問う－揺らぐ民主主義のゆくえ』 法律文化社
- クラウチ・コリン (2007) 『ポスト・デモクラシー』 青灯社
- 庄司克宏 (2007) 『欧州連合－統治の論理とゆくえ』 岩波書店
- － (2016) 『欧州の危機』 東洋経済新報
 - － (2018) 『欧州ポピュリズム－EU 分断は避けられるか』 筑摩書房
- シリネッリ, ジャン＝フランソワ (川嶋修一訳) (2014) 『第5共和制』 白水社
- 竹沢尚一郎 (2011) 「フランスにおける移民問題の複合性－サンパビエと移民第二世代の視点から」, 竹沢尚一郎 『移民のヨーロッパ－国際比較の視点から』 明石書店
- 橋木俊昭 (2015) 『フランス産エリートはなぜ凄いのか』 中央公論新社
- 田中素行 (2016) 『ユーロ』 岩波書店
- 伊達聖伸 (2018) 『ライシテから読む現代フランス－政治と宗教のいま』 岩波書店
- 田端博邦 (2017) 「ネオ・リベラリズムの終焉?－コービン, サンダース, メランションから見る政治変動」 『世界』 10月号
- 譚天 (2017) 「西欧における急進右翼ポピュリズム政党と左派政党の競争関係に関する一考察－1980年代中葉以降の頃, 仏, 独及び伊を中心に」 『法学』 第81巻第4号
- 土倉莞爾 (2013) 「社会党の政権奪還－2012年フランス大統領選挙・総選挙の考察」 『法学論集』 第63巻第3号
- － (2015) 「パスカル・ペリノーのフランス FN (国民戦線) 論」 『法学論集』 第3号
 - － (2016) 「変貌するフランス「国民戦線」(FN)」, 水島治郎編 『保守の比較政治学』 岩波書店
- 中谷義和 (2017) 「ポピュリズムの政治空間」 中谷義和・川村仁子・高橋進・松下冽編 『ポピュリズムのグローバル化を問う－揺らぐ民主主義のゆくえ』 法律文化社

佐賀大学経済論集 第52巻第4号

中山洋平 (1999) 「フランス」, 小川有美 (コーディネーター) 『国際情報 ベーシックシリーズ EU 諸国』 自由国民社

— (2016) 「福祉国家と西ヨーロッパ政党制の『凍結』 - 新急進右翼政党は固定されるのか?」, 水島治郎編 『保守の比較政治学』 岩波書店

野田省吾 (2018a) 「(書評) 中谷義和・川村仁子・高橋進・松下烈編 『ポピュリズムのグローバル化を問う—揺らぐ民主主義のゆくえ』 (立命館大学人文社会科学研究所叢書第21輯), 法律文化社

— (2018b) 「2017年ドイツ連邦議会選挙」 『法学雑誌』 第64巻第3号

墓田桂 (2016) 『難民問題—イスラム圏の動揺, EU の苦悩, 日本の課題』 中央公論新社

畑山敏夫 (1995a) 「『国民戦線』の自治体支配」 『佐賀大学経済論集』 第32巻第1号

— (1995b) 「フランス1968年5月—政治的ユートピアの終焉」, 岡本宏編 『1968年—時代転換の起点』 法律文化社

— (1997) 『フランス極右の新展開—ナショナル・ポピュリズムと新右翼』 国際書院

— (2004) 「もうひとつの対抗グローバリズム—国民国家からグローバル化への反攻」, 畑山敏夫・丸山仁編著 『現代政治のパーспекティブ』 法律文化社

— (2007) 『現代フランスの新しい右翼—ルペンの見果てぬ夢』 法律文化社

— (2008) 「2007年大統領選挙とフランスの新しい右翼—ルペンの敗北をめぐって」 『佐賀大学経済論集』 第41巻第2号

— (2009) 「現代フランスにおける青年と政治—政治的ユートピアから遠く離れて」 『佐賀大学経済論集』 第42巻第2号

— (2012) 『フランス緑の党とニュー・ポリティクス—近代社会を超えて緑の社会へ』 吉田書店

— (2013a) 「2012年大統領選挙・国民議会選挙とマリヌのFN」 『日仏政治研究』 第7号

— (2013b) 「2012年大統領選挙・国民議会選挙とマリヌの国民戦線 (FN) — 右翼ポピュリズム政党の勢力回復が意味するもの—」 『佐賀大学経済論集』 第46巻第1号

— (2013c) 「逆風のなかの欧州統一—国民戦線のEU批判とフランス政治の『主権主義化』」 『立命館大学 政策科学』 第22巻第3号

— (2015) 「マリヌ・ルペンと新しい国民戦線—『右翼ポピュリズム』とフランスのデモクラシー」, 高橋進・石田徹編著 『ポピュリズム時代のデモクラシー』 法律文化社

— (2016) 「フランスの『欧州懐疑主義』と『再国民化』」, 高橋進・石田徹編 『再国民化』に揺らぐヨーロッパ』 法律文化社

東村紀子 「フランス移民政策における『アイデンティティ』再考—サルコジ政権における『アイデンティティの危機』を問い直す」 『佐賀大学経済論集』 第51巻第4号

広岡裕児 (2016) 『EU 騒乱—テロと右傾化の次に来るもの』 新潮社

藤巻秀樹 (1996) 『シラクのフランス—新ゴースト政権のジレンマ』 日本経済新聞社

- マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)
- ブレイディ・みかこ (2017) 「反緊縮を進める欧州左派」『世界』11月号
- 丸山仁 (2000) 「『新しい政治』の挑戦」, 賀来健輔・丸山仁編著『ニュー・ポリティクス
の政治学』ミネルヴァ書房
- 水島治郎 (2016) 「『自由』をめぐる闘争－オランダにおける保守政治とポピュリズム」,
水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店
- (2017a) 『ポピュリズムとは何か－民主主義の敵か, 改革の希望か』中央公論
新社
- (2017b) 「『ひとり政党』の一人舞台はならず－2017年オランダ総選挙とポピュリ
ズム政党」『世界』5月号
- 宮島薔 (2016) 『現代ヨーロッパと移民問題の原点－1970, 1980年代, 開かれたシチズン
シップの生成と試練』明石書店
- ムフ, シャンタル (2019) 『左派ポピュリズムのために』明石書店
- 村上直久 (2016) 『EUはどうなる－Brexitの衝撃』平凡社
- モーリス・ラーキン (向井善典監訳) (2004), 『フランス現代史－人民戦線期以後の政府
と民衆』大阪経済法科大学出版部
- 吉田徹 (2011) 『ポピュリズムを考える－民主主義への再入門』NHK出版
- (2017) 「『グローバリズムの敗者』はなぜ生まれ続けるのか」『世界』3月号
- 吉見俊哉 (2018) 『トランプのアメリカに住む』岩波書店
- ルペン, マリーヌ (2017) (木村三浩編) 『自由なフランスを取りもどす』花伝社
- ロドリクス, ダニ (2013) (2016) 『グローバリゼーション・パラドクス』白水社
- 渡邊啓貴 (2015) 『現代フランス－「栄光の時代」の終焉, 欧州への活路』岩波書店
- 渡辺博明 (2017) 「北欧のポピュリズム－反税から反移民へ」, 中谷義和・川村仁子・高橋
進・松下例編『ポピュリズムのグローバル化を問う－揺らぐ民主主義のゆくえ』法律文
化社

〈外国語文献〉

- Albertini, Pierre (1997), *La crise du politique. Les chemins d'un renouveau*, L'Harmattan.
- Alduy, Cécil (2016), "Nouveau discours, nouveaux succès" *Pouvoirs*, no.157.
- Alidières, Bernard (2014), "Le temps du vote Front national et de ses représentations" dans
Giblin, Béatrice (sous la direction de), *L'Extrême droite en Europe*, Éditions La
Découverte.
- Amjahad, Anissa et Jadot, Clément (2012), "Le modèle organisationnel du Front national"
dans Delwit, Pascal (éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*,
Éditions de l'Université de Bruxelles.
- d'Appolonia, Chebel (2015), "Immigration and the 2012 Elections in France" in Goodliffe,
Gabriel and Brizzi, Riccardo (ed.), *France after 2012*, Berghahn.
- Bréchon, Pierre (2012), "La droite à l'épreuve du Front national" dans Delwit, Pascal (éd.),
Le Front national. Mutations de l'extrême droite française, Éditions de l'Université de

- Bruxelles.
- Checaglini, Claire (2012), *Bienvenue au Front national d'une infiltré*, Éditions Jacob-Duvernet.
- Cliché, Jean et Boy, Daniel (2017), "Victoire d'une nouvelle force politique face à une gauche dispersée", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- Club de l'horloge (1985), *L'identité de la France*, Albin Michel.
- Collovald, Annie (2004), *Le «Populisme de FN», un dangereux contresens*, Éditions du Croquant.
- Corbière Alexis (2012) *Le parti de l'étrangère. Marine Le Pen contre l'histoire républicaine de la France*, Édition Tribord.
- Crépon, Sylvain (2006), *La Nouvelle extrême droite. Enquête sur les jeunes militants du Front national*, L'Harmattan.
- (2012), *Enquête au cœur du nouveau Front national*, Nouveau monde éditions.
- Dabi, Frédéric (2015), "2012-2015: continuités et ruptures dans la structuration des élections PS, UMP et FN", *Revue politique et parlementaire*, no.1075.
- Delwit, Pascal (éd.) (2012), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Dézé, Alexandre (2012), *Le Front national: à la conquête du pouvoir?*, Almand Colin.
- (2016), "Le changement dans la continuité: L'organisation partisane du Front national", *Pouvoirs*, no.157.
- Dolez, Bernard et Laurent, Annie (2016), "Nord-Picardi: tournant historique, victoire de Bertrand", *Revue politique et parlementaire*, no.1078.
- Edin, Vincent (2019), *La gauche est immortelle*, Éditions de l'Observatoire/Humensis.
- Evans, Jocelyn et Ivaldi, Gilles (2017), "Législatives: Répercussions de la présidentielle et contre-performance du Front national", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- Fersan, Henri (1997), *Le Racisme anti-Français*, L'Ancre.
- Fougier, Eddy, "Les inconnues du vote des agriculteurs", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- Fourest, Caroline et Venner, Fiammetta (2011), *Marine Le Pen démasquée*, Éditions Grasset & Fasquelle.
- Fourquet, Jérôme (2014), "Municipales: le FN poursuit son enracinement", *Revue politique et parlementaire*, no.1071-1072.
- Front national (1985), *Pour la France-programme du Front national*, Albatros.
- (1993), *300 mesures pour la renaissance de la France*, Éditions nationales.
- Gombin, Joël (2016), "Le Front national après élections européennes", *Revue politique et parlementaire*, no.1071-1072.:
- Goodliffe, Gabriel (2015), "The Resurgence of the Front National" in Goodliffe, Gabriel and Rizzi, Riccardo (ed.), *France after 2012*, Berghahn.

マリヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－フランス政治の変容と国民戦線(FN)について考える(7・完)

- Heine, Sophie (2009), *Une Gauche contre l'Europe? Les critiques radicales de altermondialistes contre l'Union européenne en France*, Édition de l'Université Bruxelles.,
- Ignazi, Piero (2012), "Le Front national et les autres. Influence et évolution" dans Delwit, Pascal(éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Ignounet, Valérie (2014), *Le Front national de 1972 à nos jours*, Seuil.
- (2016), "La conversation social du Front national, mythe ou réalité?", *Projet*, no.354.
- Ivaldi, Gilles (2012), "Permanences et évolutions de l'idéologie frontiste" dans Delwit, Pasca (éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- (2014), "Réflexions sur la pousée des radicales populistes européens", *Revue politique et parlementaire*, no.1971-1072.
- (2017), "Forces et faiblesses du Front national", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- La Gauche forte (2014), *Le Guide anti-FN*, Éditions L'ai lu.
- Lebourg, Nicolas (2016), "Les dimensions internationales du Front national", *Pouvoirs*, no.157.
- Lecœur, Erwan (sous la direction de), *Dictionnaire de l'extrême droite*, Larousse.
- Le Gall, Gérard (2016), "Les élections régionales 2015: des élections de confirmation", *Revue politique et parlementaire*, no.1978.
- (2017), "Victoire Macron, contingence et nécessité", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- Le Pen, Marine (2006), *À contre flots*, Grancher
- (2012), *Pour que vive la France*, Gracer.
- Liszskai, Laszlo (2011), *Marine Le Pen. Un nouveau Front national*, Éditions Favre SA.
- Machuret, Patrice (2012), *Dans la peau de Marine Le Pen*, Seuil.
- Maillard, Denis (2019), *Une colère française*, Éditions de l'Observatoire.
- Mandon, Aurélien (2013), *The Mainstreaming of the Extreme Right in France and Australia*, Ashgate.
- Manière, Philippe (2002), *La vengeance du peuple. Les élites, Le Pen, et les Français*, Plon.
- Mayer, Nonna (2012), "De Jean-Marie Le Pen à Marine Le Pen: l'électorat du Front national a-t-il changé?" dans Delwit, Pascal (éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Mègret, Bruno (et als.) (1992), *Le mondialisme. Mythe et réalité*, Éditions nationales.
- (1998), *La Nouvelle Europe. Pour la France et l'Europe des nations*, Éditions nationales.
- Mossuz-Lavau, Janine (2017), "Elles votent", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- Muxel, Anne (2012), "La tentation des partis extrémistes chez jeunes" dans Orfali, Birgitta

- (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.
- Orfali, Birgitta (sous la direction de) (2012), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.
- Ouraoui, Mehdi (2014), *Marine Le Pen, Notre faute. Essai sur le délitement républicain*, Michalon Éditeur.
- Perrineau, Pascal (2012), *Le choix de Marianne. Pourquoi, pour qui votons-nous?*, Fayard.
- (2013), "L'Électorat de Marine Le Pen, ni tout à fait le même, ni tout à fait un autre" dans Perrineau, Pascal (sous la direction de), *Le vote normal. Les élections présidentielle et législatives d'avril-mai-juin 2012*, La Fondation nationale des sciences politiques.
- (2014), *La France au Front*, Fayard.
- (2016), "Montée en puissance et recompositions de l'électorat frontiste", *Pouvoirs*, no.157.
- Pisani-Ferry, Jean (2005), "Europe:une crise qui va loin" dans Mergie, Alain et als, *Le jour où la France a dit <non>. Comprendre le referendum du 29 mai 2005*, Plon.
- Philippot, Damien (2011), "2007-2011: le retour du Front national" *Revue politique et parlementaire*, no.1064.
- Raynaud, Philippe (2016), "La nébuleuse intellectuelle de Front national", *Pouvoirs*, no.157.
- Rosso, Romain (2011), *La face cachée de Marine Le Pen*, Flammarion.
- Rouban, Luc (2017), "Le vote des fonctionnaires", *Revue politique et parlementaire*, No.1083-1084.
- Simon, Jean-Marc (2011), *Marine Le Pen, au nom du père*, Éditions Jacob-Duvernet.
- Sineau, Mariette (2012), "D'un Le Pen l'autre: l'image du Front national à la veille de la Présidentielle de 2012" dans Orfali, Birgitta (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.
- Schemeil, Yves (2010), "Les Français et l'Europe: espérance et prudence", 『日仏政治研究』第5号
- Taguieff, Pierre-André (2012), *Le nouveau nationa-populisme*, CNRS Éditions.
- Turchi, Marine (2016), "L' Argent du Front national et des le Pen. Une famille aux affaires", *Pouvoirs*, no.157.